

2021年12月1日（水）

『 写真の話 』

卓話者 谷田 育子 会員

- 1 「写心」という言葉がある。
感動を覚えた被写体に出会うこと。
光と影の芸術。
- 2 花の接写から始めた。花曇りの日が最適。花は咲き始めのところが一番エネルギーがあって美しい。花と生き物で動きを表現。
- 3 毎月、写真クラブの例会に参加して3枚ずつ提出し、皆で評価し合う。写真の枚数ができないときに、車で走っていてちょっと止めて撮るような枚数合わせをすると、すぐにバレて、心が入っていないと指摘される。
- 4 良い光と、良い被写体に出会うことが、良い作品ができるポイント。何回か、空の雲を見ながら、目的地に向かって高速道路を走ったこともある。
- 5 カメラは、最初はキャノン・A1。絞り、シャッタースピード、ピント合わせ、全て手作業から始めた。フィルム、リバーサル（スライド写真）で、これが一番納得のいく作品を作ることができた。
次にキャノン・イオスの時代が来て、オートフォーカスでリバーサル、その他は手作業。
- 6 やがて時代はデジカメの時代になり、フィルムが要らなくなった。簡単な操作で、すべてオートで写真が撮れるようになって、誰でもどこでも、光があってもなくてもそれなりの写真が撮れる素晴らしいメカではあるが、出来上がった作品はそこにあるものを写しただけのもの。熱が冷めて、だんだん遠のいてしまった。



以上